

第一節 ターミア

連邦暦五七二年二月一日
共和国暦七二二年六月六日。

“敵艦隊……前方、二八八光秒。速度差、〇・〇〇三三光秒。ほぼ相対的静止状態。現速度を維持すれば、ワープ可能宙域まで約二時間”

“連邦空軍艦艇数約五〇〇〇。『シグナ・フォース』級超大型戦艦を旗艦とする制式艦隊。通信解析によれば、トルキエスト・アレンタ空軍中将麾下の第九艦隊ならん”

“ドライバオム宇宙要塞より定時入電。通信波傍受によれば、本宙域にて有力なる数群の敵艦隊が活動中”

“第二先遣索敵隊の報告によれば……”

新任の司令長官副官マイ・ヴァルトフロツエ中尉は、先遣索敵艦からの報告を纏め終えると、副官専用コンソールからふわりと離れた。

クリース・ローク中佐をリーダーとした一部隊が、分派されたのはマールクの艦隊がドライバオムを離れる直前のことである。ラインク少将麾下の防空艦隊から、高速巡洋艦『アイレース』を旗艦として、駆逐艦や強襲揚陸戦艦を中心とする一〇〇隻ほどの艦艇が割かれ、ローク中佐の指揮する一〇〇〇名ばかりの陸戦隊を護衛する。

“細部は任せるけれどね……”

共和国暦七二二年五月二六日、彼女自身よりもやや年下らしい女性士官を伴って出頭したローク中佐に、作戦案と命令書を手渡しながら、

マールクは念を押している。

“余り派手にやらないでくれるとありがたい”

無表情な薄い琥珀色の目が、ちらと動いてマールクの傍らに佇立するネイス・ミュッケル大将……今次作戦開始直前、マールクは彼を正式に大将に補っている……を視界に入れた。

ミュッケルの端正な表情はやや青ざめて見えたが、ローク中佐の視線に特に反応を示そうとはしない。

“アー ज्याナから……ナキャソまではまず感づかれずに侵入^{はい}れるだろうからね”

もう一度、琥珀色の眸が動き、眉間に微かな縦皺が寄せられる。視線は、今度はまっすぐにマールクの濃い灰色の目を捉えていた。

“不同意かい?”

視線が作戦書に移る。

マールクは頷いた。

“時間が問題だというのは理解している。『アイレース』で直接、衛星軌道まで入ったんじゃないか感づかれる。陽動が必要だな。幾つか案を考えておいた。どれを採るか^はは現場の判断に任せるから、いきなり衛星軌道まで突っ込むのだけはやめ^はにしておいてくれるとありがたいな”

“了解です、閣下”

初めての応答の言葉は短く、素気ない。“マールク艦隊で最も有能な副官”と呼ばれるローク中佐だが、一方で、“なんであれで副官が務まるのか理解できない”という評価も受けている。“あれじゃ、ローク長官、マールク副官だ”と言われるほどに、ローク中佐は無口であり、マールクの方が彼女の微かな表情の動きで相手の意を悟るよう馴らされているようにさえ見えたのだ。そして、それは事実の完全な叙述ではなかったにしても、無責任なうわさ話と言っわけでもなかった。

ローク中佐は、一歩下がって控えている若い女性士官に肩越しの視線を投げた。漆黒の髪をきつちりと軍帽に押し込んだ女性士官は一步を踏み出し、明らかに強張った表情で敬礼する。深みのある黒い、しかしややきつい感じの眼差しがまっすぐ、『ル・ヨントの常勝提督』に向けられる。

「マイ・ヴァルトフロツツエ中尉が小官を代行します」

「ヴァルトフロツツエ中尉です。七十二年士官学校卒業。“ヘルム宙域会戦”に、戦艦『ランサー』で初めて従軍いたしました」

「マイ……ヴァルトフロツツエ中尉ね」

マールクには女性の容貌をあれこれと議論する趣味はない。答礼はおざなりではなかったものの、それほど注意を相手に払ったものでもなかった。

「宜しく頼む。書類の山の中で溺れ死にたくはないからね」

ちよっとひっかかります……

ミュッケルの言葉にマールクは、きょとん……一二〇〇万もの将兵を統べる宇宙軍元帥の表情にこんな形容が許されるのならば、だが……しかし、明らかにこれ以外の形容詞では表現のしようのない目つきで親友を見上げる。

「何に？」

「ヴァルトフロツツエ中尉です」

「どうひっかかるんだ、ネイ？」

「マイ……というファースト・ネームは珍しいですから」

「どういう風に？」

「このタイプのファースト・ネームは母星には少ないようです。どち

らかと言えば、ドレドの方でよく使われる名前だったはずですが……」

だからどうってことがあるのかい……マールクの反応はミュッケルを苦笑させる。

「そもそもローク中佐を推薦したのはきみだよ、ネイ」

「ええ」

「いい後任を選んでおいてくれと頼んだのは私だし、ローク中佐は、少なくとも信頼のできる士官だと思っている」

「ゆえに、彼女が選んだ後任も信頼できると？」

「少なくとも、ローク中佐が私たちにとって不利益になる選択をする理由はない。ヴァルトフロツツエ中尉がドレドの出身者で、たとえばだよ、例のドレド空襲で肉親を亡くしていたとするね」

共和国政府と参謀本部は、ドレド空襲はマールクの独断専行として喧伝し、ドレドでのマールクへの憎悪をかき立てようと試みてきた。

実際、ドレド周辺宙域の宇宙賊鎮圧に当たっていたヤンデキフィティやシャブリも、ドレド人のテロに悩まされていたものだ。

「だとしても、その程度のバックグラウンドは直ぐに洗い出せるし、だいたい、すぐにそれだって分かるような本名をそのまま名乗ってるんだ」

「ええ、そうですね。だとすると、閣下……？」

「分かってるよ」

マールクは微笑い、直ぐにその笑みを引っ込める。

「中佐にも中佐の都合ってやつがあるんだろっからね。余り詮索してもしようがない」

「では、閣下」

ミュッケルも微笑で応じる。

「ローク中佐が余り派手にやりすぎないように、フェレットラインク

少将)には注意を促しておきましょう」

ヴァルトフロツェ中尉は、一段高くなった指揮シート上を見上げる。約三〇〇光秒の距離を隔てて、連邦空軍第九艦隊を追うマールク艦隊の旗艦『ジェレスエン』号ブリッジの照明は抑えられ、モニタや計器の放つ緑やオレンジの光が幻想的な雰囲気を与えている。

ル・ラント共和国宇宙軍元帥クローネス・マールク麾下の戦闘艦艇約一万八〇〇〇隻は、シエルメス連邦圏へ一〇〇〇光年弱……この規模の共和国宇宙軍艦隊がかつて踏み込んだことのない連邦圏の深部……へ侵攻しつつある。

マールクに報告を行なうとき、コンソールを介して呼び出してほしいが、戦闘中でないときは直に行なうのを、この新任の司令長官副官は好んでいた。

「連邦空軍？」

「報告が入りました……三個艦隊がユアロフレスタを出しました。他の三個艦隊は、依然所在不明です」

「変だね……三個艦隊でお迎えはないだろうにね」

「コーラルへの手当てではありませんか？」

艦隊参謀長席の人物が会話に参加する。元『ドレスト』号艦長、クレエル・ヴェルエリユーネ准将である。

マールクは、ドレド戦役中から参謀長をいたことがない。マールク艦隊の作戦は、マールクが立案し、ミュッケル、ローナク、ドレスンの三人がこれを補佐するというかたちで運営された。マールク自身が優れた戦略家であり、同時に戦術家であったために、参謀の必要性が低かったのである。

戦場が広大になり、“三将”……ローナク、ミュッケル、ドレスンのいずれもが独立した部隊の指揮を執らねばならなくなった今次大戦では、マールクは優れた戦術上の共振器を『ドレスト』号のヴェルエリユーネ艦長に見いだす機会が多くなった。今回の作戦開始に先立って、マールクはヴェルエリユーネを艦隊参謀長に転任させ、『ジェレスエン』号に伴ったのである。

「それはちよつとね……」

マールクは納得しなかった。

「……先だって一個艦隊半ばかり、ユアロフレスタから移しただろう。あれがコーラルへの手当てだったはずだ。いま、もう三個艦隊も割かなければならない理由はない」

「ならば、分進合撃でも狙っている、と？ いささか陳腐ではありませんか？」

「何を考えるのやら……ちよつと得体が知れないね。これまでだって結構、読めないことが多かったからねえ……」

マールクは、レーフラムの病臥を知らない。

「ここはさつさと片づけた方がいいかも知れない」

ヴェルエリユーネは納得する。

「では、艦隊の速度を上げます」

「ああ。シャトルの用意を。ネイへの連絡は確実に頼むよ」

最後の一言はヴァルトフロツェ中尉に向けられていた。

「はい、ミュッケル提督に宛てて通信シャトルを用意いたします」

ちよつとびつくりしたようにマールクは目を睜り、それから頷く。

ローク中佐は復唱の習慣を持たなかった。

「あ、ああ……宜しく頼む」

水際だった敬礼が司令長官に伝わる。安心したように、マールクはコンソールに視線を落とした。真剣な表情だが、別に作戦を練っていた

るわけでもなく、出航直前に出版された古典文学の復刻版を読書器にかけているのだ。最近のマールクは、文学書を顔の上に載せて居眠りをする習慣をやめたようだった。

「……挫折せる文学の徒なんだよ。将来、大学に戻るときのために勉強しているんだ」

とは本人の弁解であるが。

「なに、たんなる暇つぶしさ」

ベイ・ドレスン中将の身も蓋もない評論である。

連邦暦五七二年三月九日。連邦空軍の主力、カーツ大将麾下の約一万隻は、マールク艦隊の右翼約三〇光年の距離を維持しながら迂回しつつ右へ旋回し、ジェレスタの率いる一万八〇〇〇隻は約六〇光年の距離からマールク艦隊の左翼後方への旋回運動を開始していた。天頂方向から見れば、二匹の巨大な蛇が左右から、小蛇を追い回す大蛇の尻尾に噛み付こうとしているかに見える。マールクがそれと気づいてどちらか一方に反撃を加えれば、連邦空軍は軽戦しつつ後退し、他の一方がマールクの後背に襲いかかる。マールクが反転すれば、また他の一方が……これを繰り返せば、いかにマールクが優れた戦術家でも必ず戦い疲れて連邦空軍の包囲網に落ち込むに違いないかった。連邦空軍は総兵力で勝り、補給力で勝り、地の利で勝っている。包囲網が完成されれば、連邦空軍に敗北はあり得なかった。

ブレンハイム・ヴェイノールド少将をはじめとする連邦空軍艦隊の幕僚団の必勝の確信を覆したのは、この日、連邦標準時三時四分に第九艦隊が発した緊急電である。

“敵艦隊、約一時間前に一〇時の方向へ転針、当艦隊との距離を急速

に開きつつあり。追撃すべきや否や、指示を願う”

無意味な雑音の中から第九艦隊からの連絡が拾い上げられた時、顔色を失わなかった幕僚はヴェイノールド一人だったといってもいい。

「これは……どういうことだ、ヴェリイ。マールクは見抜いたのか？」

「分かりません。察して、離脱を図っているとも考えられますが……」

「アレンタに返電。跳躍航法^{フリップ・トレイサー}追跡装置搭載の索敵艦を派遣し、マールク艦隊の航路を追わせよ」

カーツは、微かに浮かんできた掌の汗をハンカチで拭う。

「ネレイド少将はどこにいるか？」

「航行艦橋におられるはずですよ」

「はず」とは何か！

珍しい叱声。カーツの副官であるアブドレイ少佐が背を硬直させる。

「ネレイド少将とリアー中尉の所在を五分以内に確認し、報告せよ！」

「り、了解であります」

慌てて自分のコンソールに向き直るアブドレイから視線を離し、カーツは微かなため息を付く。ヴェイノールドが長官席を振り仰ぐ。

「ネレイド少将を呼び出しますか？」

「カーツは僅かに迷ったようだった」

「何か意見具申は出ているか？」

「いえ……」

ヴェイノールドはかぶりを振る。

「いえ、ありません」

「ならばよい。所在さえ、明らかにしておればな」

「閣下……」

アブドレイが割って入る。

「ネレイド少将とリアー中尉の所在が分かりました。申し訳ありません

ん、医療ブロックです」

「悪いのか？」

「ノーラ軍医長から診断書が出されております。要観察状態は続いており、任務上の必然性がなければ航行艦橋に詰め続けるのは、ネレイド少将の体調に害を及ぼすだけで何の意味もない……と」

レーフラムに対する艦隊総参謀長への復讐命令が伝達されていないという信じがたい事務上のミスが犯されているなど、この時のカーツには思いも寄らないことである。

咳払いし、ヴェイノールドがカーツの注意を喚起する。

「閣下、敢えて具申させて頂きますが……」

「すぐに呼び戻せと言うのだろう、ヴェーリイ」

「さよつです。第九艦隊の救出が急務であつた以上、小官がこの席にあるのはやむを得ないことでした。しかし、マールクの意図が不明になった以上、前提条件が変わつたと考えるべきです」

「貴官ではマールクの意図が読めぬと言つのだな」

「小官はナウシユヒル閣下とともに前線の指揮にあたるのが、現在の局面ではベターな選択に思われます」

「分かつている。だが……」

「アレンタ艦隊より入電。マールク艦隊、ワープしたもよう」

カーツの言葉を、通信探査艦橋からの報告が遮る。

「なに？」

「跳躍航法追跡装置にてワープ方向を追跡中……」

「どう読む、ヴェーリイ？」

「撤回したか、あるいは我が艦隊を罠に誘い込むための既定の転針か……それとも、もつと他の意図があるのか……いずれにしても、ワープ方向の結果が出てみないと結論は出せません」

時間を頂きたい、としてヴェイノールドは即断を避け、カーツもそ

の判断を了承する。

じりじりするような時間が過ぎていった。

カーツは指揮シートに深く身を沈め、ヴェイノールドはコンソールに様々な情報を表示させては消し、また表示させている。一辺が三〇センチほどの立体スクリーンの中で、数種類の光点がもつれ合い絡まり合つて彼我の艦隊の推測航路と仮想の戦闘を繰り広げた。

連邦標準時三時三二分、第九艦隊旗艦『シャドール』からル・ラント艦隊のワープ・アウト・ポイント確認の報告が入った。

「閣下、これは！」

「ゼムリア……か」

ラタウ恒星区の首都星系。

「ゼムリアを経て、メルティアに向かう航路……かも知れません」

カーツに伝えながら、ヴェイノールドの顔色は青色巨星の光をまともに浴びたようになる。ゼムリアを経由して、メルティアへ……それは、会戦劈頭にル・ラントのヒースクリフ・ローナクが選択した進撃路。最も短截に連邦圏の中枢を撃つことのできる経路でもある。

「まさか……とは思いますが、この段階で再びメルティアがル・ラントの手に陥るようなことがあれば……」

「連邦の統治能力を信じる恒星区は消滅するな。マールクの狙いは、連邦をばらばらにすることか……」

「しかし、マールクにはそれほどの補給能力はないはずです」

「ヴェーリイ……」

カーツは首を振る。

「マールクを阿呆だと言つのか、貴官は。もし、そうだとすれば、彼と二年近く戦つて、なお勝てぬ我々は何なのだ？」

「……」

「マールクは、我々がこれまで戦つた中で最も合理的で天才的な戦略

家だ。彼がやれると考えたのなら、やれるのだ。しかし、我々は、彼に連邦圏の中枢を再び撃たせるわけにはいかん」

「追撃命令を、閣下」

ヴェイノールドは決断したようだった。包囲網は完成できないかもしれない。しかし、マールク艦隊が連邦圏深部へ剣を突き刺すのだけは何としてでも防がねばならなかった。カーツは許可を与え、連邦空軍艦隊は針路を大きく変えた。

「閣下」

『ジェレスエン』艦上で、ヴァルトフロツツエ中尉がマールクを振り仰ぐ。

「ネイからかい？」

「はい。連邦空軍艦隊の第一部隊は、本艦隊に続いてワープ・イン。ワープ・トレイサーの反応から見て、九九パーセント以上の確率で本艦隊の追撃に向かう見込み」

「九九パーセント……だつて？」

マールクの反応はヴァルトフロツツエ中尉を戸惑わせる。

不審がありますか……中尉に向かってマールクは、ちょっと困ったような表情になる。

「そうやって他人の行動を確率論で表現できるって言うのはどういうことなんだろうかな。思つまいと思つても、つい思つてしまつんだ」

わたしは文系だつたのでね。余計な一言をマールクは付け加える。

「跳躍航法追跡装置の特性上、やむを得ないとだと聞いています」

ヴェルエリユーネ参謀長が助け船を出す。

「原理上、不確定性を避けられない。ワープの距離と方向を同時に完

全な正確さをもつては特定できない。この場合、九九パーセントの確率で、連邦空軍艦隊のワープ・アウト・ポイントが我々の極く近くの宙域となると判断できた……とそう言う意味になります」

「あとの一パーセントは？」

ヴェルエリユーネはヴァルトフロツツエ中尉を促す。

「中尉、もう少し報告があるはずだが？」

「……ワープ距離推定は約四一・三光年。誤差一パーセント。つまり、〇・四光年の範囲に連邦空軍艦隊がワープ・アウトしてくるという予測です」

「あ、なるほどね……」

「〇・四光年では直ちに戦闘距離には入りませんが、距離が縮まれば縮まるほど、誤差が収斂しますからな。計算上では二日後でしょう」

敵の第二部隊の動向も入っている……ヴァルトフロツツエ中尉は続ける。

「一二・二光年です。こちらの方との接触がやや早くなる見込みです」

「結構……」

マールクは頷く。

「取りあえず予定通りやってくれないか、参謀長。ひよつとしたら、また読まれているかも知れないけれど、今のところは分からない。だからむやみに予定は変えないことにするよ」

「了解です、閣下」

マールクが艦隊の針路を大きく曲げたターレン恒星系から約四〇光年の宙点にあるのが、連星系として知られる恒星系ハル八である。カーツの本隊に先んじて、ハル八恒星系の外縁部にワープ・アウトし

たジェレスタは、先行する索敵艦からの報告にショックを受けた。マールクがワイプアウト・ポイントから数十光秒の位置に艦隊を展開させ、彼らを迎撃する陣形をとっているというのである。

「マールク艦隊は急速に接近中。予想接敵時間は三〇分後」

「ばかな……マールクは連邦圏中枢に電撃作戦をかけるのではなかったのか……」

連邦空軍を背中に受けて数十光年を進み、反転してこれを迎撃できるなど、軍事常識から外れていた。敵を背にして転針したのちに反転し、迎撃態勢を整えるなどという離れ業は、まず普通の軍隊にはできないことではない。

しかし、マールクはやってのけた。

「カーツ閣下の艦隊の到着は？」

「あと一〇時間かかります。まだ丸一日かかる予定でしたから、座標の調整に十分な精度が取れていません」

艦隊に戦闘準備を命じながら、ジェレスタは今度の会戦がこれまでも例のない苦戦になることを直感した。マールク艦隊は二万、ジェレスタの麾下にある艦艇数も約二万。しかし、緒戦でこれほど見事にはめられた会戦は、これまでない。

「砲戦距離、主砲砲戦距離まであと一〇秒……」

マールクの先陣、レイトウラント・シャブリの艦隊で、砲術士官の手が一齐に主砲の発射装置に伸び、そして固定した。彼らの視線は、映像パネルではなく、彼らに命令を下すシャブリ中将の右手に吸い寄せられた。

「変だな……」

シャブリは呟き、年齢にしてはずいぶん白いものが多くなった髪に手をやる。元々は黒髪のシャブリだが、「ドレド戦役」以来、白髪

の量が急激に増えた。髪の半分以上が既に色素を失って、全体的には薄い灰色に近くなっている。

「こつとも容易く引つかかってくれるとは……」

「敵艦隊、射程内に入ります！」

シャブリは右手を肩の高さに挙げる。裏があるにしても、まず目の前の敵を倒さねば明日がない。

「撃て！」

シャブリの右手がさつと弧を描くのと、砲手たちの手が狂暴な破壊者の戒めを解き放つのと、いずれが先行しただろう。幾人かは、確実にシャブリよりも先に発射スイツチを叩き付けるように引き落とし、またある者は、緊張の余りに強ばった筋肉に思わぬ反抗をされ、一瞬の遅滞のちに我と我が身を罵りながらトリガを引き、あるいはスイツチを叩きつけたのである。

凄まじいほどのエネルギーの奔流が、ジェレスタ艦隊の前衛を直撃し、突き抜けた。数隻分のビームをまともに浴びせられた連邦空軍の戦艦は、苦悶する間もなく蒸発し、数十発の超融合核宙雷を叩き込まれた巡洋艦は、焰の中を狂いまわりながら中空に四散していく。

「撃て、撃ち返せっ！」

ジェレスタ艦隊の砲手たちとて非戦主義者の立場を堅持する意図は毛頭ない。口々に呪いの言葉を吐き散らしながら、報復の一撃を投擲する。荒れ狂う火龍の群れがシャブリの艦隊に躍りかかり、防禦シールドを噛み破る。装甲の金属を一瞬にして蒸発させたエネルギーの奔流が動力炉を、あるいは格納庫の宙雷を誘爆させた。一瞬にしてシャブリ艦隊の全面に超融合核爆発の火球が毒々しい閃光の華を咲き乱れさせ、その行き足を束の間は停止させるかに見えた。

が、一瞬でしかない。四五〇〇隻を数えるシャブリ艦隊に加えて、マックス艦隊とローナク艦隊が巨大な翼を広げる。二艦隊合計一万一

〇〇〇隻が連邦空軍艦隊を痛烈に拍撃する。数十万本のエネルギー・ビームによる強烈極まる斬撃は、ジェレスタの前衛ナイク艦隊に叩きつけられ、連邦空軍の不幸な艦艇を片端から薙ぎ払い、撃ち砕く。

ナイクの必死の叱咤にもかかわらず、彼の艦隊は悲鳴を上げて左右に逃げ崩れた。それと見て取ったジェレスタが、直率の第五艦隊を前衛に押し出して突進を続けるシャブリ艦隊に激烈な報復の砲火を浴びせかける。正確極まる集中砲撃は、シャブリ艦隊の艦列を連鎖する火球の群れで覆い尽くし、次々に戦列艦を脱落させる。

シャブリの突進は衰えない。

ありたけの戦艦と大型巡洋艦を艦隊の先頭に敷き並べ、砲艦とミサイル艦から間断のない射撃を継続して連邦空軍の戦線に亀裂を穿ちにかかると、直撃を受けた戦艦が大爆発を起こして無数の破片を撒き散らし、直撃した宙雷が連鎖反応を起こして純白の閃光で巡航艦を覆い尽くす。爆風が搭乗員を薙ぎ倒し、数千度の熱線が搭乗員の宇宙服をすら焼き払い、荒れ狂う高速中性子の波濤が殺人粒子と化して彼らの皮膚を内臓を生きながらに侵食する。爆風にのって飛来する超硬質セラミック、超硬度鋼の破片は、生身の人間を紙を裂くようにやすやすと切り裂き、奔出する鮮血は艦のフロアといわず、壁といわず、奇怪な鮮紅色の抽象画を描きだす。

マールク艦隊は火力で優り、将兵の練度で優り、しかも、連邦空軍の意表をついた精神的な優越をも手にしていた。まず、ナイク艦隊が戦列を乱して半ば潰乱し、救援に出た第五艦隊も、シャブリの突進を支え切れずあつと言つ間に艦列を削り取られて後退に後退を重ねるはめになった。シャールブックが、他の二艦隊のバックアップを試みたが、ローナクとマックスが、無制限ともいえるほどの激烈な砲火を集中してシャールブック艦隊の連携のとれた動きを遮断した。

“こちら……第六七七巡航……敵の攻撃は……的、救援を、救援を！”

“第六六一駆逐戦隊……連絡途絶”

“第八九戦闘集団、壊滅”

ジェレスタの旗艦『ゼクセア』の通信回線を悲鳴が乱打し、次々に途絶えていく。

「前衛集団、ほぼ壊滅の模様……」

「閣下……後退すべきです、このままでは艦隊は壊滅的な打撃を被ります」

司令官を見上げる艦隊参謀長の目は血走っていた。

唸り、ジェレスタは首を振る。

「だめだ。今、後退すれば、マールク艦隊の全面的な突撃を招く。組んでしまったのだ。このまま踏み留まれ。あと僅かでカーツ閣下の艦隊がかけつけてくれる。そうなれば、反撃して奴らにつけを支払わせてやるのだ」

ジェレスタの判断は、この時点において完全に正しい。しかし、持ち堪えられるか否か……ジェレスタ自身にも自信はなかった。

シャブリの猛攻に耐えかねて戦線を崩した前衛集団に引きずられるようにじりじりと後退するジェレスタ艦隊に、ローナク艦隊が左翼、マックス艦隊が右翼に、その巨大な翼を展開させた。『ゼクセア』のリーダーがそれを捉えたとき、一万隻をはるかに超えるマールク艦隊の猛撃がジェレスタ艦隊を包み込んだ。

ふたりの中将の右手がシャブリ同様に空中に弧を描いて翻り、次の瞬間、宇宙が爆発した。正確に言えば、一万八〇〇〇隻を数えるマールク艦隊の一斉射撃が、ジェレスタ艦隊に降り注いだのである。その凄まじさは、今次大戦でも屈指の集中斉射として特筆されるべきものだった。

それは、命中する、などという言葉で表現できかねるほどの猛烈な集中砲火であり、マールク艦隊の砲火は、文字どおり豪雨のように連

邦空軍艦艇になだれ落ち、あらゆるものを引き裂き、噛み碎いて、虹色の閃光の中に一切を還元していく。

ジェレスタは、積極的な反撃を断念するしかなかった。戦線を縮小し、防禦球形陣をとってマールク艦隊の攻撃を防ぎ止め、砲艦の大口径熱線砲と長距離ミサイルで反撃する。しかし、この必死の戦法も、かさにかかって攻撃を反復するマールクの前には長続きしそうにもなかった。『ドレスト』級戦艦の大口径砲は、容赦なくジェレスタ艦隊の艦列を削り落とし、獲物を捕らえた大蛇のようにジェレスタ艦隊を締め上げ、戦力の最後の一滴までを絞り落とそうとする。マールク艦隊の猛撃の前に、連邦空軍の艦艇は徐々に抵抗力を失い、力尽きて倒れ伏していく。戦艦群の防禦壁ですら、強烈な酸に冒されたように侵食され、じわじわと突撃路を開かれていく。

「来援は近いぞ、生き延びろ」

ジェレスタは督励し、破れかかる戦線に予備兵力を投入して支える。誘導にかかった部隊が無秩序に突出して包囲されるのを、左右の部隊を並行前進させて逆包囲し、救出する。マールクの繰りだす斬撃は、一刻ごとにジェレスタの艦隊深くに切り込まれる。一瞬ごとに断末魔の苦悶を呈しながらも、それでもジェレスタの艦隊は戦い続けた。無論、いずれマールクの斬撃がその心臓を抉りぬくであろうことは誰の目にも明らかであつたし、それより前に多量の出血の挙げ句に衰弱死に至るかもしれない。

「よく、戦いますな」

ヴェルエリユーネ准将は呻くようにつぶやく。

「ああ、そつだね」

マールクはさして意外そうでもなかった。

「さすがに“連邦の鋼鉄の爪”。楽には勝たしてくれない」

「予備隊を投入しますか？」

マールク直率下に三〇〇隻弱。旗艦『ジェレスエン』を厚く包み込んだ総予備隊は、まだ一隻も戦線に加わってはいなかった。

「いない」

マールクは手をふる。嫌いな料理を出された子供のような仕草だつた。

「あの艦隊だけじゃない。連邦空軍の主力が来る。ネイの言うことだから、間違いはないけれど、どうかな、准将。どうして、連邦空軍はこんな見え見えの策に引っ掛かったんだろうね？」

「さ、それは、何とも」

連邦空軍艦隊は追ってくる。

追って来ないわけにはいかないのだ。

「まあ、最終的に失敗はしたけれど、連邦にとってヒースの第一撃はほとんど心臓に届きかけていたはずだね」

再確認するようにマールクは呟く。

「開戦劈頭のローナク艦隊による奇襲攻撃。それを今度は真つ正面から仕掛けられる。連邦空軍としては最も考えたくない事態でありましようから。ですから、罠かも知れないと恐れつつも、連邦空軍は取りあえず我々を追う。追わざるを得ない」

「そついつこと」

「それで、われわれは連邦空軍の予想よりもはるかに早い時期に反転し、逆に待ち受ける宙域に展開し、連邦空軍艦隊のワープ・アウト宙域に戦場を設定する……ただし……」

「ただし、連邦空軍がそんな簡単にこつちの口に飛び込んでくるはずはない……んだけどね」

マールクの視線の先、戦闘情報スクリーンの中で、ジェレスタ艦隊は一瞬ごとに追いつめられ、一瞬ごとに苦悶の様相を露わにしていくなかに、あるいはミュッケル提督のおっしゃる通りか、と」

「レーフラム・ネレイド少将という艦隊参謀が病気で倒れて、それから暗殺者にまで襲われたって言う、あのニュースかい？まず、このネレイド少将が連邦空軍艦隊の作戦頭脳だつていう証拠がないし、それによりよって、こんな時期にそんな重要人物が倒れたりするかな」「戦争の指導は、極度の過労を招きます。そうではありませんか？」「……まあね。もし、ネレイド少将という人物がこれまでの連邦空軍の作戦を支えていたとして、それから今の時点で戦線を離れているなら、これはチャンスかもしれないねえ……」

連邦空軍の分進合撃を察知したのはミュッケルだった。彼は、マールクが発見できなかったジェレスタ部隊を発見し、連邦空軍が分進合撃を図っていると看破したのである。

「……連邦空軍がただの分進合撃を実施するとは思えません」

ミュッケルは、彼自身が「ターミア辺境宙域の戦い」で使った戦法を、連邦空軍がより大規模に反復する可能性を指摘した。であれば、その戦法を駆使したミュッケル自身である。連邦空軍の戦術の裏をかくのに何の困難も感じなかった。

「問題は、連邦空軍艦隊の作戦頭脳が存在です」

それが最大の脅威だった。「ヘルムの会戦」では、連邦空軍艦隊はマールクの意図を悉く読み切った。結果的にマールクの意図しなかった艦隊兵力同士の間決戦と消耗戦が始まってしまい、ただでさえ貧困な共和国宇宙軍の兵站は破綻寸前に追い込まれた。読まれれば、再び消耗戦である。今回は、補給線が伸びている分、マールクに不利だった。

レーフラムの病臥と奇禍の二ニュースをもたらしたのはミュッケル。

だが、ミュッケル自身、レーフラムが彼らにとって最大の脅威であるのか否かに関しては完璧な自信を欠いていた。

「このネレイド少将が健在で、艦隊作戦の指揮をとっていれば、乗るまい。もし、彼がおらず、ヘルムの時のような先読みの能力を欠いているのなら、彼らは慌てて追ってくる。包囲作戦はバーになり、直線的な追撃戦。数が多いほうが有利になるね」

そして、連邦空軍は乗った。

「閣下」

軽やかな声がかげられ、マールクは視線を転じた。

「敵主力艦隊です。あと一ワープの距離に接近している模様です」

「ありがとう……で、中尉、ほかには？」

「ありません」

ヴァルトフロツツエ中尉は眉をわずかにひそめた。

「ああ、そう……後方警戒を厳にするように指令を。連邦空軍のことだからね。いつどこから出てくるか、分かったものじゃない」

その間にも、マールク艦隊の包囲はますますその範囲を締め、ジェレスタ艦隊を見舞う砲火はいよいよその密度を増していた。頑強に抵抗を続けていたジェレスタ中將も、マールクの砲火が旗艦の至近にまで迫つたのを認め、内心で覚悟を決めざるを得なくなっていた。

「こちら第七七戦闘集団、損害甚大、救援を請う、至急に救援を！」

「第六二二巡航戦隊、戦線を維持できません。後退許可を！」

味方の悲鳴に、しかし、ジェレスタは応えることができない。すでに予備兵力も、機動部隊も最後の一部隊までを投入し尽くし、旗艦「ゼクセア」は直衝艦数十隻を従えるに過ぎない。直衝艦のほとんどは軽巡洋艦と駆逐艦であり、巡航戦艦はわずかに三隻を数えるのみ。

それでもジェレスタ艦隊は絶望的な坑戦を続けていた。劣勢の挽回は望み得べくもなくなっていたにせよ、彼らはなお熱線砲を、宙雷を、

陽子砲を撃ち続けた。一隻、一機でも多く、ル・ヨント艦隊を彼らの道連れにすることに固執しているかのようにさえ見たのである。

「……？」

レーフラムは、新しく出された一般命令を前にして怪訝な表情になる。

“艦隊は転進し、マールク艦隊の連邦圏侵攻阻止に向かう”

レーフラムは更に首を傾げ、コースレスクのターミナルから艦隊の針路のデータを引き出す。一瞥して、端正な容貌から血の気が引いた。

「メイ！」

「提督？」

いつになく切迫した口調がメイリアの胸を騒がした。

「ブリッジへ行ってくれ、メイ」

「え？」

真摯な凝視を向ける海^{マールフル}の色の瞳の持ち主に、レーフラムは言う。

「閣下に会い、わたしの現役復帰の許可を具申してほしんだ。具申書はすぐに書く」

「でも……」

「一刻を争うかもしれないんだ、メイ。艦隊はマールクの手のひらで踊らされているかもしれないんだ。もし、そうなら艦隊は全滅する。

わたしはきみを死なせたくない。だから、頼む、行ってくれ」

こくと頷き、メイリアは士官室を出た。『シグナ・フォース』号は巨大な艦首を巡らし、転針後最初のワープに入ろうとしていた。

『シグナ・フォース』の中枢コンピュータがレーフラムを呼び出し

た。

“メイからです”

メイリアの姿がすでにコンソールのスクリーン上にあった。

“カーツ閣下の許可が下りました。すぐに艦橋へきてください”

「オーケー」

“手間取って済みません”

戦場を前にして、『シグナ・フォース』号の艦橋も殺気立っていたはずである。メイリアがカーツに会おうとしても、中々取りついではもらえなかったことだろう。

「いいよ、気にしなくとも。きみは艦橋にいるのか？」

「はい」

“すぐに行く”

士官室は艦橋から遠くない。自走^{インジグ・ロード}路から艦橋士官専用の反重力シャフトに乗り換える。ドアが開くと戦闘艦橋^{CIC}だった。

臨戦態勢が取られ、戦闘艦橋の照明は輝度を落としている。補助コンソールの一つについていた小柄な人影がレーフラムに気づき、ぱつ

と振り返る。翻った髪が、淡い照明を孕んで銀白色に輝いて見える。彼女の身動きが、他の要員の注意をもレーフラムに向けさせたようだった。声にならないどよめきが艦橋を緩やかに支配し、いくつもの視線が、艦橋中央に歩み寄るレーフラムの長身を追った。

「ジェレスタ艦隊がマールク艦隊と接触した」

ヴェイノールド少将が戦闘情報を参謀長用のコンソールに表示させた。前置きを口にできる状況でないことがコンソールに表示されている。

「マールクは、恒星系ハルハでジェレスタ艦隊を待ち伏せした。どうやら我々は一杯食ったらしい」

「接触は何時間前です？」

「約四時間……ジェレスタ提督の艦隊は一万八〇〇〇、マールクのそれは二万をこえるらしい。ジェレスタ艦隊は何時間も持たない」

「二万……？」

「そうだ。可能なかぎり速度を上げてはいるが、我々が戦場に到着するまで、まだ五時間かかる。策は？」

「第二戦闘集団を短距離ワープで先行させましょう」

第二戦闘集団は『シグナス』級超大型戦艦で構成された重火力集団である。「第一次ターネブルク会戦」後に竣工した『シグナス』級戦艦は一一隻。これに既存の『シグナス』と『ラーノン』級超大型巡航戦艦二〇隻を加えて三二隻。

「第二戦闘集団の火力は一〇〇〇隻の艦隊に匹敵し、すべての艦が重力波遮蔽装置を備えています。短距離ワープでマールクに奇襲をかけ、我々が戦場に到着するまでの時間を稼ぐことができるでしょう」

「しかし……三〇隻で二万のマールク艦隊に……？」

「五時間足らずもてはいいいです」

言い切り、レーフラムはカーツの裁可を仰ぐ。戦場到着の遅れている第九艦隊を最後衛に配置したうえで、第二戦闘集団を先行させる。

ジェレスタ艦隊との合流が成功すれば、あとはこの宙域での艦隊決戦には拘泥せず、いったんユアロフレスタへ引き上げる。

「ユアロフレスタへ？」

「マールクは連邦圏深部に侵攻します。させておき、連邦圏の中央部でもう一度挑みます。今度の作戦を失敗させれば、マールクにはあとがありません」

「了解した」

カーツは頷き、指揮を委ねるべき士官の名を問う。

「わたしが行きます」

「待て、何も貴官が自分で指揮を執らなくとも……」

「時間がありません」

弾き返すようにレーフラムは応える。振り返り、そこにメイリアが立ちつくしているのを確認する。

「メイ」

「は、はいっ！」

「同行してほしい。『シグナス』に移る」

「は、はいっ」

何て芸がないのかしら、とはメイリア。レーフラムの作戦案を脳裏で反芻してみても頼を強ばらせる。『シグナス』を初めとして、引力圏内ワープ能力を持つ超大型戦艦は三〇隻余り。通常戦艦五〇隻分の戦闘能力を持つと言われる『シグナス』級とは言っても、相手は二万隻。大丈夫だ、メイ

「え？」

戦闘艦橋を出ながら、レーフラムは微笑つ。その微笑が、メイの背に凍り付くものを感じさせた。

……違つわ……何か、違つ。

「トウ……少将？」

「大丈夫だよ、メイ。死に行くつもりはない。そんなつもりなら、君に同行を頼んだりはいしないから」

もう一度、レーフラムは微笑つ。見慣れたはずの暖かな微笑は、メイリアの背に生じた氷柱を幾らかでも溶かしはしなかったのだ。

メイリアの頭の中で声が反響する。

……本当にこの人はあのトウリユー・ネレイドなの？あの人は本当にこんな風に微笑つた？